



き せつ まち
季節のない街

定価はカバーに表示してあります。

新潮文库 草 134 M

昭和四十五年二月十六日 発行
昭和五十年七月二十日 十一刷

著 者
山 本 周 五 郎

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

◎ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Kin Shimizu 1970 Printed in Japan

新 潮 文 庫

季 節 の な い 街

山本周五郎著



新 潮 社 版

1924

目次

街へゆく電車	七
僕のワイフ	三三
半助と猫	五三
親おもい	六七
牧歌調	九〇
プールのある家	一二〇
箱入り女房	一三六
枯れた木	一五〇
ビスマルクいわく	一六四

とうちゃん	一九六
がんもどき	二〇八
ちょろ	二四〇
肇くんと光子	二六五
儉約について	二八六
たんぼさん	三〇一
あとがき	三三二

季節のない街

街^{まち}へゆく電車

その「街」へゆくのに一本の市電があつた。ほかに道は幾つかあるのだが、市電は一本しか通じていないし、それはレールもなく架線もなく、また車^{しゃ}軀^{たい}さえもないし、乗務員も運転手一人しかないから、客は乗るわけにはいかなのであつた。要するにその市電は、六ちゃんという運転手と、幾らかの備品を除いて、客観的にはすべてが架空のものだったのである。

運転手の六ちゃんは「街」の住人ではない。中通りと呼ばれる、ちよつとした繁華街に、母親のおくにさんと二人でくらしていた。父親はなかつた。死んだのか別れたのか、その消息は誰も知らないが、ともかく父親を見た者はなかつた。おくにさんは女手でてんぷら屋をいとなみ、六ちゃんと二人で肩身せまくくらしていた。——断わつておくが「てんぷら」屋といつても、じつは精進揚げのことである。

おくにさんは四十がらみで、顔も軀^{からだ}も肥えていた。眼にはあらゆる事物に対する不信と疑惑のいろを湛^{たた}え、口は蛤^{はまぐり}のように固くむすばれ、いくら茶色っぽいかみの毛は、油つけなしのひっ詰め髪に結^{むす}われていた。

古い伊勢^{いせ}縞^せか、木綿^{もめん}の布子^{ぬのこ}か、夏は洗いざらした浴衣^{ゆかた}に、白い割烹^{かつぱう}前掛^{まえかけ}をつけ、夏冬とおして衿^{えり}に手拭^{てぬぐい}を掛けていて、黙つててんぷらを揚げたり、客の応対をしたりするのであつた。衿に掛けた手拭と、白い割烹前掛とが、喰^たべ物を扱う彼女の動作を、いかにも清潔らしく見せるように

感じられた。

おくにさんは無口だった。客にもよけいなあいそは云わず、あたしの揚げるてんぷらの味が充分にあいそを云っている筈だ、と自負しているようなそぶりがちらちらした。——事實はそうではなく、絶えまなしに六ちゃんのことを気にかかり、絶えまなしにおそっさまの御利益や、奇蹟や、効験あらたかな祈禱師の噂などが、そのいくらか茶色っぽいかみの毛を油けなしでひっ詰め髪に結った頭の中で、せめぎあっていたのだ。

一日のしょうばいが終り、店を閉め、寝る支度をすませてから、おくにさんは仏壇を開いて燈明と線香をあげ、玩具のような団扇太鼓を持って、六ちゃんと並んで坐る。できるなら標準型の団扇太鼓にしたいのだが、近所に遠慮があるし、(なぜなら近所にはてんぷらを買ってくれる客が多いから)まさか太鼓の大小によって、おそっさまの機嫌が変るものでもあるまいと思い、多少ひけめを感じながら、その小さな太鼓でまにあわせているのであった。

「なんみようれんぎよう」坐るとすぐに六ちゃんが、仏壇に向っておじぎをしながら、母親に先んじてお願いをする、「——おそっさま、毎度のことですが、どうか、かあちゃんの頭がよくなるように、よろしくお願いします。なんみようれんぎよう」

そして、おくにさんが玩具のような団扇太鼓を叩き、お題目をとえ始めるのであった。

おくにさんの祈りが、わが子六ちゃんのためであることは断わるまでもない。にもかかわらず、お題目とおそっさまに対する祈念が、主として母親の本復を六ちゃんのほうで乞い願っているところに、天秤の狂いのようなものがあつた。

六ちゃんはふぎけているのではない、あてつけや皮肉でそんなことをするのもなかった。かあちゃんが自分のことで世間に肩身のせまいおもいをし、自分のためにおそっさまを拝んだり、お呪禁まじないをしたり、いろいろな祈禱師を招いたりするのはわかっていた。そんな必要はない、かあちゃんはそんな心配をすることなんか少しもないのだ。

どうしてそんなに心配ばかりするのさ、かあちゃん、なにが不足なんだい、と六ちゃんは幾たびも云った。そうだよ、不足なんかないよ、心配なんかしちやあいないよ、とおくにさんはいつも答えるが、その顔にあらわれている望みを失ったような悲しみの影は、消えも弱まりもしなかった。六ちゃんにはそれがかりなのだ、このままでもなんの不足もないのに、精をすり減らしているかあちゃんが哀れで、そんなかあちゃんをなんとかしてまともなものにしてやりたい、と念じているのであった。

「お願いします、おそっさま」おくにさんのとなえるお題目のあいまあいまに、六ちゃんはしんそこ祈るのであった、「——毎度のことで飽き飽きするかもしれないが、かあちゃんのことばよろしくお頼みします、なんみょうれんぎよう」

おくにさんは胸がせつなくなってくる。もうなん年となく同じおつとめを欠かさずやっているのだが、わが子のその祈願を聞いたたびに、そのたびごとに胸がせつなくなり、涙がこぼれそうになった。

この子はこのなかに親おもいで、こんなにちゃんと口もきける、きつといまに頭もまともになるだろう、おくにさんはそう信じようとする。六ちゃんはそういうかあちゃんの顔を、憐れむような眼つきで見まもり、ちょうど母親が怯えておそいる子をなだめるように、大丈夫だよ、なにも心配

することはないよ、万事うまくいってんじゃないか、氣を樂にしなよ、と云いきかせるのであった。

六ちゃんが好きなのはかあちゃんと、「街」の住人である半助と、半助の飼ひ猫のとらだけで、反対に云えば、この二人と一匹だけは六ちゃんのことを好いていた。その他の人たちを六ちゃん是不好かない。かれらは六ちゃんをからかったり、悪口を云ったり、六ちゃんの運轉する市電の妨害をしたりする。特に、市電の運轉の邪魔をする者が多いので、六ちゃんは氣のしずまるときがなかった。

じつに知恵のないはなしだが、その町内の人たち、ことに子供たちは、六ちゃんのことを電車ばかりと呼んでいた。そうかもしれない、客観的にはそれが当っているかもしれないが、主観的には六ちゃんのもっとも勤勉で、良心的な、市電の運轉手であつた。

朝、――起きるとすぐに、六ちゃんは電車の点検をする。電車は車庫の中にあり、車庫は家の横のろじにある。

狭い勝手の揚げ蓋の隅に、古い蜜柑箱があつて、その中に口の欠けた醬油注ぎや、ペンチや、ドライバーや、油じみた軍手や、ぼろ布が整頓されてある。これらは客観的にも存在するのだが、そこにはまたコントローラーを操作するハンドルや、名札や、腕時計や、制帽などが、主観的には存在するのである。口の欠けた醬油注ぎも、主観的には油差であつた。

六ちゃんは油差とドライバーとペンチを持って車庫へゆき、自分の運轉する電車を点検する。客観的にはなにも存在しないのだが、六ちゃんの主観には、そこにはつきりそれが見えるらしい。

彼は仔細ありげに眉をしかめたり、ときには舌打ちをしたり、片手で顎を撫でたりしながら、その電車のまわりをぐるっと廻ってみる。ボディを手で叩き、踏んで、ボディの下の子軸や、エンジンの連結部を眺めたりするのだ。

「しゃあねえな」六ちゃんは頭を振って呟く、「整備のやつ、なにようしてるんだ、なっちゃねえじゃねえかな」

彼はドライバーを使ってどこかを直し、ベンチを使ってどこかを直し、軸受のところを足で蹴ってみる。もういちど蹴ってみて、首をかしげて舌打ちをし、さも不満そうに舌打ちをする。

「もうこいつも古いからな」六ちゃんは怠け者の整備係に譲歩して呟く、「やつらに小言を云ってもしゃあねえだろう」

終って顔を洗い、朝めしが済むと出勤であるが、おくにさんの材料を買出しにゆく日は、帰って来るまで待たなければならない。買出しはたいい一日おきであるが、毎日のときもあって、すると六ちゃんは苛立っておちつかず、こんなに遅刻が続いては成績に影響する、と不平を云うのであった。

出勤するときは勝手へまわる。例の蜜柑箱から制帽を取ってかぶり、油じみた軍手をはめ、コントロール用のハンドルと名札を取りあげる。右のうち現実に存在するのは軍手だけで、他の三品が客観的には架空なものなことは、まえに記したとおりである。

六ちゃんは電車へ乗り、まず名札を札差に入れ、ハンドルをコントロールのノッドへ嵌め込む。そして右手で制動機のハンドルを握み、左廻しにがらがらと廻してみたら、次に右へがらがらと廻し、制動機に故障のないことを確かめる。これらの動作は毎日きちんと、狂いのない順

序で行われるし、六ちゃんの顔には、どんなに優秀な運転手よりも敏感そうであるとい、しんけんそのものといった表情があらわれるのであった。

「さあ」と彼は呟く、「発車しようぜ」

そして制動機をがらがらとゆるめるのだが、これは右手で握んだハンドルを放して、右の腕をちよつとあげればいい。すると制動機はがらがらと巻き戻るのであった。

人は六ちゃんのことを「電車ばか」と呼ぶ。

六ちゃんはほかではなかった。ひとびとの意見にさからうようだが、彼は幾人もの専門医の診察によって、白痴でもなく、精神薄弱児でもないことが、繰り返し証明された。彼は小学校を出ている。だが初めから終りまで、なんにも勉強しなかったため、各学年の修業免状も、卒業証書も貰えなかった。彼は学齢に達したとき小学校にはいり、六年かよって小学校を出たのだ。学課はなに一つまなばなかったし、体操も遊戯もなかった。初めて教室へはいったときから、ずっと電車の絵ばかり描いてい、六年のあいだ、ただもう電車の絵だけを描き、家にいるときは電車の運転に没頭しようとした。

人が彼をばかと呼ぶとおり、慥かに六ちゃんの電車は現実には存在しないし、それを発車させ、運転し、終電に至って入庫させるまでの作業は、すべて架空なものであった。

けれども、それなら現実に市電を運転している者はどうであろうか。——中通りを北へ行って、橋を渡り、横丁を一つ越すと本通りがあって、市電やバスや、各種の車が往来している。それはみな、現実の運転手によって、現実に運転されているのであり、その事実には些かの疑問もない

が、しかし、はたしてそのままを信じていいだろうか。

ここに一人の運転手が、いま市電の運転をしている。だが、彼の心はそこにはない。彼はゆべ細君とやりあったこと、またそのあと、近所の呑み屋で侮辱されたことなどから、少なからず厭世的な気分になっており、そのため感情が苛だっていた。彼は空想の中で細君を痛烈にのしり、呑み屋で自分を侮辱した客を繰り返し殴りつけ、そんな不愉快なめにあうのも、結局は自分が市電の運転などをしているからだ、という理由で、その職業までも呪った。こういう気分であったから、乗客の待っている停留所を素通りしてしまい、下車する客にどなられた車掌から停車のゴングを鳴らされ、慌てて停車操作をする自分に、いっそうはらを立てる、という結果になるのだ。

もちろん、他の職業人でも同じような例があるだろう。たいていの人間が自分の職業に満足していないらしい、口ではどう云おうとも、心の中では自分の職業を嫌うか、軽蔑するか、憎みさえしている者が少なくないようだ。

これらの人たちと六ちゃんを比較するのは、正しい評価ではないかもしれない。けれども、六ちゃんはまさしく、精神的にも肉体的にも、市電を運転することにうちこんでおり、そのことに情熱を感じ、誇りとよろこびを感じているのであった。

さていま、六ちゃんは中通りを進んでゆく。左手のハンドルをローからセコンドにあげ、右手でブレーキのハンドルをしっかりと握り、そして車輪の音をまねる。

「どですかでん、どですかでん」

これははじめ、どで、すか、でん、と緩徐調でやりだし、だんだんに調子を早めるのである。つまり、車輪がレールの継ぎ目を渡るときの擬音であって、交叉点こうさてんにかかると次のように変化する。

「どでどで、どでどで、どですかでん」

これは交叉する線路の四点の継ぎ目を、電車の前部車輪四組と、後部四輪とが渡る音であった。突然、前方に不注意な歩行人があらわれる。六ちゃんは足を停めて、右足の爪先つまさきで地面を叩きながら、がらがらがんと警告のゴングを鳴らす。不注意な歩行人は気がつかない。線路の上をまっすぐにこっちへやって来る。こういうのは殆んどよその町の人で、六ちゃんのことを知らず、六ちゃんの運転している電車や、その線路も見えないのだ。

六ちゃんは驚いてまっ赤な顔になり、慌ててけんめいに停車操作にかかる。

「あぶないぞ」

六ちゃんは喚わめきながら、左手でコントローラーをがちゃんとゼロに切替え、右手でブレーキのハンドルをぐるぐると、ありったけの力で廻し、上半身を反そらせてうーっと緊しめあげる。口できききき、とブレーキの緊しまる音をまね、その電車はかろうじて停車する。

「あぶないじゃないか」

六ちゃんは車窓から首を出し、赤く怒張した顔でその不注意な歩行人を叱しかりつける。

「電車にひかれるじゃないか、電車にひかれたらどうしようもないじゃないか」それからしんけんな眼つきで睨にらみつける、「線路をあるくのは違反なんだ、田舎者いなかものはそんなことも知らないんだからな、ほんとに、気をつけなくちゃ困るじゃないか」

不注意な通行人は口をあけ、六ちゃんのただならぬ顔を見て、いそいで脇へよけてゆく。六ちゃんはそのうしろ姿をいまいましそうな、軽侮の眼で見やりながら、なんてまぬけなやつだ、と呟く。

「なんてやつだ」と六ちゃんは云う、「自分がどこをあるいてるかもわからねえんだからな、いなかもの」

そして、右の脇をあげてブレーキをがらりと解き、コントローラーをセコンドに入れ、緩み終ったブレーキのハンドルを止めて握ると、左手で速度をあげ、どですか、でん、と進行してゆくのであった。

町内の人たちはもう六ちゃんに興味をもってはいない。六ちゃんはその町の風物の中に溶けこんでいるのだ。六ちゃん自身もかれらには無関心であるし、子供たちがわるくふざけたり、からかったりしても、ちょっと睨むだけで、まったく相手にならなかった。

中通りを三往復すると、六ちゃんのうちへ帰って休み、また三往復しては休みして、終電になる。その日の気分によって終電の時間はまちまちだが、途中で半助の飼い猫の、とらに会うと、電車を停めて抱きあげ、半助のいる「街」まで届けにゆくのであった。

とらは黒ずんだ三毛猫の雄で、すばらしく大きい。顔はフットボールの球くらいもあって、まゝるく太く、軀もよく太っている。半助が飼うようになってからでも七年になるが、猫について見識のある人に云わせると、少なくみつもっても、十二、三年はとしをくっている、ということだが、この界限でとらがボスのナンバー・ワンであることには、紛れがなかった。